

No	投稿内容
1	PGLそのものについてではないのですが、ITCC-TP020041「ビジュアル解説 ITコーディネータテキスト 第3版」のような教材も併せて執筆して頂けると嬉しいです。試験対策講座などを開いて裾野を広げることができるのではないかと考えます。
2	初期のITC専門知識教材「02 プロセスフロー 目次7項、戦略情報化企画」を紐解いております。今国家的な取り組みとしてIT総合戦略室を設け進めております。一般企業においても大中小各企業に関わらず、本プロセスが重要な意味を持っております。彼の外資系大手ベンダーの技術者も講演で本基本プロセスはしっかりしており、ITCプロセスフローの存在を認めておられました。初心忘るべからずという言葉を思います。現状の国家戦略もそのような観点では問題ありです。急がば回れという言葉もあります。
3	<p>1. PGL v3.1のP89にある「調達要件定義」(IT資源調達ステップB4-1)は、IPAなどでは「要求定義」と呼んでいる。「要件」と言った場合、それがIT導入ステップB4-2「要件定義」なのかB4-1「調達要件定義」なのか混同しやすいため、B4-1では「要求定義」とするほうが良いと思われる。</p> <p>2. PGLは、ダイジェスト版だけでなく全体の電子版をPDFファイルとして無償公開していただきたい。PGLがユーザー企業でもITベンダーでもあまり活用されていない理由に、有償販売のみの発行があると思われる。無償公開されれば、ITC試験の応募者増加も期待でき、ITCがユーザー企業や行政機関の支援もしやすくなる。</p> <p>3. ConTenDoでのPGL電子版は、廃止いただきたい。ビューワーの使い勝手が非常に悪く、図表も見づらい。リフロー形式にしたことが仇となり、表示環境に応じてページ番号が変動してしまう。ケース研修の場面で「何ページを見てください」といったインストラクションができず、結局、紙の印刷版が手放せない。</p>
4	<p>①世の中の的にITとデジタルという言葉を使い分けるようになってきているので、PGLにも反映させてはどうでしょうか？ (例)・IT⇒従来型のIT、業務プロセス、効率化、守り、というイメージ ・デジタル⇒データを活用、マーケティング、付加価値アップ、攻めのイメージ</p> <p>資産としてのデータ、データマイニング、データ分析的な要素を入れた新規ビジネス創出、AIやロボットも活用した既存業務の完全自動化、プロセスマイニングのような業務プロセスの自動化というところまで踏み込まないとPGLが時代の変化に追いついていかないと思います。</p> <p>②特にIT戦略・業務改革のところが社内の業務プロセス改革による効率化の要素が強いため、ビジネスモデル改革、顧客への付加価値アップなどの要素を取り入れるとよいと思います。経営戦略ではマクロ環境のチェンジゲームにどう対応していくかというような、シナリオプランニングや中長期的な企業存続的な要素も入れていくのが、VUCA、DXの時代に合っていると思います。ケースはBtoBのビジネスではなく、BtoC、BtoBtoC、CtoCなど最終顧客が一般消費者であるビジネスを扱い、カスタマージャーニーやサービスブループリントなどの要素も入れて、例えば卸売業者がECサイトで顧客に直販するD2Cビジネスを新たに開始する、既存事業の強みを生かしたプラットフォームビジネスを新たに開始する、というような要素を入れていくと時代にあってくると思います。既存ビジネスの深化と新規ビジネスの創出の両利きの経営の要素を経営戦略編に入れて、中小企業においても事業ポートフォリオから見直していく時代であるという感じがよさそうに思います。</p> <p>③どの企業もDX人材不足のため、企業内におけるデジタル人材・DX人材（IT経営人材としてもよさそう）育成もITコーディネータの役割の1つになってくるのではないかと感じております。そのため、人材育成の要素をPGLに入れるのもありかと考えています。</p> <p>④現在のPGLはどうしてもシステムインテグレーションの要素が抜けきらないので、ケースで扱うシステムを企業の基幹システムではなく顧客向けのサブスクリプションサービスを提供するシステムにして、システム導入後のカスタマーサクセスの要素を入れてみてはどうでしょうか？</p> <p>システム導入後のカスタマーサクセスがキモとなるケースを扱うことで、システム導入がゴールであるシステムインテグレーションの要素が消えるのではないかと思います。システム初期導入の要素はPGLから思い切って減らしてしまい、システムリリース後のカスタマーサクセス、及びアジャイルによるシステム開発を継続することでサービスを維持・発展させていく、というケースにしていく方がこれからの時代にあってくると思います。システムの保守・運用ではなくサービスの提供というように、観点をシステムではなくシステムを媒介したサービス全体に持っていきとよいと思います。</p> <p>⑤残念ながらITコーディネータがあまり最新のテクノロジーの状況、テクノロジーを活用したビジネスモデルの変革の事例（主に海外事例）に詳しくなく、むしろユーザ企業の若い担当者の方が詳しいということが最近では顕著になってきていると感じています。PGLに具体的なテクノロジーやビジネスモデルについて言及する必要は無いと思いますが、ITコーディネータとして新たなテクノロジー、テクノロジーを活用した新たなビジネスモデルの知識を身に着ける機会が増えていくとよいと思います。</p>

No	投稿内容
5	<p>1) 全体コンセプトに関して 1-1) DXの時代の要求を取り込んでください。(ただ、単純に取り込むのではなく中小企業用にアレンジしていただきたい)、=>以下にも記述しましたが、“経済産業省のデジタルガバナンス・コード実践の手引”を具体的に取り込んだら？ 1-2) PGLで経営変革にビジネス創造も取り込んだとありますが？ =>まだまだ取り込みが足りない！ =>イノベーションをきちんとISO56002：2019(イノベーション・マネジメントシステム)の心を入れて事業創業の流れを説明してほしい。参考に、昨年PMIJのフォーラムで発表し、優秀賞を受賞した”日本の組織に活をいれるには、(PMの国際標準ISO21500とイノベーション・マネジメントの国際標準ISO56002を横目に)”を添付します。</p> <p>2) 第2部 IT経営認識領域に関してPGLで経営者が深く関わる度合いをもっと深めるとありますが？ =>経済産業省のデジタルガバナンス・コード実践の手引(DXの成功ポイント)をもっと前向きに使用し、特に5つのポイントを丁寧に説明。①気づき ITコーディネータと経営者の対話と記述されている ③外部の視点 ITコーディネータの名前が具体的に記述されている。これらを ITC協会で上手に生かしてください。！！</p> <p>3) 第4部 IT経営共通領域に関して C1の記述にもっと明示的に、“プログラムマネジメント”を記述し、単体の業務を実現するのではなく、組織の目標にあった、一連の流れの中で業務をマネジメントすることを記述してほしい。そろそろ、“プログラムマネジメント”の文言も世の中に認知されてきたのではないかとできれば、ポートフォリオマネジメント、ビジネスアナリシス、プロダクトマネジメントの文言も入れたいところではあります。</p>
6	<p>改訂版をお願いしたい事は以下の3点です。</p> <p>1) ITコーディネータのふるまいをガイドするPGLとすること。 「IT経営推進者」といった曖昧で漠然とした対象者ではなく、ITC資格者になる者が習得すべきものという概念にはっきりと戻して頂きたい。</p> <p>2) ITCが実践すべきプロセス(順番)とルール(原則)を明確に示す内容に ITCのふるまいの基本を学ぶ者を対象として考えたとき、剣道や柔道、茶道のように「形」をしっかりと教える内容にして頂きたい。</p> <p>3) 可能な限り軽微な改訂に これまでPGLで学んできた1万数千人のITCのことも考慮し、改訂することを目的とせず、前述の2点を満たす範囲で必要最低限の改訂にして頂きたい。以上、PGLβ版でITCの役割と使命を学んだ一ITCからのお願いです。</p>
7	<p>ITコーディネータとしての私見ではありますが、今回の改訂では、さらなるDX加速に向けたクラウド利用促進のプロセスや、経営者のIT領域における右腕として、経営者の想いを引き出し、事業拡大や経営品質向上に資するIT投資を「監理」できる役割を、より明示することで、ITコーディネータの役割の重要性を広く認知頂くものを目指すべきと考えます。</p>
8	<p>※添付ファイルでのコメントなので一部抜粋しました</p> <p>●新しいコンセプトの構築と訴求が必要ではないか(キャッチコピー：書籍タイトルの副題など) 例えば、(ジャストアイデアですが・・・)①IT経営、「ITを経営の力にする」(現状) ②「DX経営を支えるPGL」、「DX時代の羅針盤としてのPGL」など、場合によっては、ガイドラインのタイトルの変更も必要でしょうか。例えば、IT経営推進→DX経営推進に変更する等。ただし、今後ともIT経営とDX経営は同じような意味として使っていくのか否かも検討が必要。</p> <p>●誰の立場でのPGLにするのか ・ITコーディネータの立場・視点(2.0版)→ITコーディネータプロセスガイドライン ・主に中小企業の経営者の立場・視点(3.0版)→IT経営推進プロセスガイドライン</p> <p>訴求相手については、例えば、中小企業の経営者は今何に悩みどうしようとしているのか、それにITCはどう応えようとしているのかを明確にしておくことと、この辺の情報の把握は重要。</p> <p>●関連書籍の改版をどうするか：実務ガイド、実践力体系など PGLの改定の程度にもよりますが、実務ガイド、今は絶版になっている実践力ガイド、その他の書籍についての改版についても検討が必要でしょう。PGLの構成との関連で検討するとよいでしょうか。また、ITCや制度、活動実態、資格取得メリットなどを紹介する書籍を日経BP社のような影響力の大きい出版社から刊行することも検討したらいかがですか。</p> <p>●デリバリ方式について：書籍・デジタル化・カスタマイズ支援：診断ツールなど 従来の紙媒体での提供に加え、電子媒体(電子書籍やガイド類のデータ化など)での提供も考えたらいかがでしょうか。さらにガイド類はカスタマイズしやすいように支援ツール・診断ツールなどを用意するとよいのではないのでしょうか。</p>

No	投稿内容
9	<p>■ガイドラインは、Ver2とVer3の“良いところどり”での改訂が良いと思います。 PGL3.1は、「一般や経営者にも役にたつ」というコンセプトでの改訂であったとの認識です。改訂ガイドラインの意義と成果は尊重しつつも、ITコーディネータにとっては、やや経営寄り（上流）となったと感じています。あくまでも主体は、『「ITコーディネータ」を目指す、IT設計・開発・運用に携わるエンジニア』（以下エンジニア）と思います。ガイドラインが経営者寄りになった分、エンジニアにとっては、即使える、参考になる情報が薄くなったのではないかと感じます。IT経営推進者としては、現ガイドラインの記されているA、B1~B3といった領域を十分に理解することが重要であることは理解でき、経営側の受験者も尊重する必要があると思いますが、エンジニアにとって、「今の業務の勉強になる・使える」も重要と感じます。</p> <p>改訂ガイドラインでは、ITコーディネータが主体であった前バージョンとの「良いところ取り」を考えていただければと思います。</p> <p>■『ITコーディネータ実践ガイド』との両輪</p> <p>ガイドラインは、毎年変わるものではありません。日進月歩のITの世界を考えるに、普遍・変化との両面を見ていく必要があると思います。『ITコーディネータ実践ガイド』は、実践的な内容ですが、認知度も低く、改定もされておらず、「もったいない」と感じています。エンジニアによっては身近なテーマで、認知度・練度やケース研修での取り上げ方なども変わってくるのではないかと思います。</p>
10	<p>課題というより期待する点ですが、下記に列挙させていただきます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 時代に合わせて変化するところと、ITCとして変わらない部分を明確にする PGLが時代に合わせてバージョンアップしていくのは素晴らしいことだと思います。また、PGL3からPGLがITCのためのものではなく、IT経営に進む企業などのものになったと理解していて、それも良いことだと思います。ただ、一方でITCを仕事にしていたり資格者として誇りを持って日々の活動をしている人もいるので、「いくら時代が変わってもITCとしてここだけは変えられないという骨格」も明確になると素晴らしいと思います。 2. デジタルガバナンス・コードなど最近のDX関連のガイドラインとの紐付け 昨今、デジタルガバナンス・コードや、AI・IoT関連のさまざまなガイドラインが各省庁、団体から発表されています。外部から見ると、次期PGLもその一つと捉えられるかもしれませんが、PGLはぱっと出のものではなく、20年以上の歴史があるものです。そこで、次期PGLはDXに取り組もうとする企業が最初に取り取るようなバイブル的なものにするという気概で作成いただきたいと思います。バイブルといわれるためには、その内容もさることながら、参考となるガイドラインなどの文献との紐付けがしっかり行われていることも必要です。次期PGLを説明することがDXセミナーとして成立するようなものが理想的かもしれません。 3. ITC有資格者にも次期PGLの理解を問う制度を設ける せっかく次期PGLができて、そこに追従しないITCばかりでは意味がありません。再試験までは不要としても、次期PGLに関する研修（E-Learningを含む）の受講を資格更新条件にするというのも一つの考え方もかもしれません。もしくは、そうした研修を受講したITCは、その旨をITCAサイトのITC紹介ページに表示するというのも良いかと思います。 4. 次期PGLは無料でPDFを公開する もちろん紙の書籍を販売されても良いと思いますが、それとは別に取り回しの良い電子データ（iPadなどでメモ書き可能なPDF）として無料公開しても良いと思います。まずは手軽に読めるようにするというのがITC制度の裾野を広げることになるはずで、販売する書籍は、PGLそのものではなく、PGLの解説書（PGL+事例集+試験問題集）のようなものが良いかもしれません。
11	<ol style="list-style-type: none"> ①ターゲットをITCに戻した方がよいと思います。 ②PMBOK等他の知識体系の最新の知見を取り込んでいただきたい。（初版を作成するときの意識で取り組んでほしい） ③DX、SDGs等IT、経営に関する最新の話題を取り込んでいただきたい。（もし、話題が陳腐化すれば、次回更新で削除すればよい） ④誤字脱字のチェックは確実に行っていただきたい。
12	<p>改訂ということで、文章の過不足を見直すということも必要かもしれませんが、そもそもPGLの中での重点はどこか、あるいは何か、を確認するという議論もあった方が良いのではと思います。重点という意味は、企業さんを指導する場合に必ずやることという様な意味です。例えば、各プロセスごとに成果物がありますが、成果物はドキュメントを作るだけではなく、関係者で内容を共有することだと思いますが、そこまで踏み込んだ指導が来ているか、という様な確認です。ということは、PGLに書かれたことは、どのように実践されているかという観点も含めた見直しということになるかと思いますが。あるいは実践することを前提とした場合、どこまで書かなければならないかという様な議論があっても良いのではないかと思います。</p>

No	投稿内容
13	<p>※添付ファイルでのコメントなので一部抜粋しました</p> <p>PGL3.Xの改定の際に2.Xより大きく変更したがその内容を是正するべきだと考えています。</p> <p>●プロセスについて、 変革認識フェーズで変革構想書（企画書・提案書）は良いと思っておりますが、その後の流れがプロジェクトと日常常務（旧プロセス）がうまく流れていません。そのため、一般的な経営の流れとPGLの流れに乖離が出てしまっています。中期経営計画を上位にし、プロジェクトを全面に出し、PHLとしてはプロジェクトのみにすべきだと思います。（プロセスはモニタリングのところのみに記載） 次期変革構想書を作成し変革構想に戻りますが、ダブリ感があります。次期変革構想書は評価にとどめ、変革構想に流すべきだと思っています。PGL2.0のIT戦略で一体化していた業務改革プロセスを抜き出し、ビジネス創造と合わせて新たに記載されていますが、機能していないと思われる。業務プロセス改革は、IT戦略の一部に戻し、ビジネス創造のところのみ残すべきだと思います。</p> <p>●PGLの対象や構成について、 PGL3では経営者をターゲットになっていますが、PGLとしてはメイン読者をITCに戻した方が良いと思います。基本原則に補足タイトルがありますが、かえってわかりにくいと思います。補足タイトルははずして必要なら説明に入れるようにした方が良いと思います。読みにくいという意見も多くあるので、各項の説明は2ページもしくは4ページで作成するのではいかがでしょうか。PGLは詳細に踏み込まないのはそのまま、必要ならガイドブックなどを別途作るのが良いと思います。</p>
14	<p>今回、改訂するのであれば、「読みやすく」、「理解しやすく」だと思います。このため、図表を多くしたり、先輩ITCとの対談形式にするとうまいと思います。また、基本原則は、もっとシンプルにして、それぞれに、実例をつけると、言葉尻だけでなく、リアルに理解できると思います。電子書籍の時代かも知れません。</p>
<p>※直接、お問い合わせや寄せられたコメントを追記しました。</p>	
15	<p>PGLでのITCの立場や役割、判断基準や実行基準が曖昧になっている。ITCとして必要な知識や能力を、ITCの立場・役割に応じて明確に示すことがPGLの本質だと考えます。また、校正が十分にできていないので、曖昧表現や用語のばらつきがまだ残っている。たとえば、プロセスとプロジェクトの関係で、特にB3とB4の関係が分かりづらく、説明の中でも、IT戦略プロジェクトとIT化プロジェクトが混在しています。IT経営の成熟度では4つの視点や評価項目を説明しているが、レベル毎の定義や考え方の指針がなく、このままでは使えないと思います。成熟度は非常に重要な視点かと思うので、改訂での検討テーマとして取り上げて欲しいところです。</p>
16	<p>PGLの巻頭の部分で、ITCの人材像・役割・必要なスキル等は「実践力ガイドライン」に委ねると書かれていますが、「実践力ガイドライン」は2013年以降改定されておらず、実態が伴っていないです。PGLはITCの立場や役割、判断基準や実行基準と必要な知識や能力を示す基本文書であり、知識や能力の具体的な詳細については「実践力ガイドライン」に記載されるべきだと思います。ITのトレンドや新しいソリューションについては「実務ガイド」に記載されるべきであろう。</p>
17	<p>個人の主観にならないよう専門団体の知識を活用する事も必要かと思えます。例えば、PMBOK7での標準、知識体系とPGLや実務ガイドに一体感を持たせる事も面白いと思います。また民法改正で「瑕疵担保責任」は「契約不適合責任」となったが、用語の変更や記載内容の修正を進めた方が良いと思います。</p>
18	<p>時代は開発するのではなく、利用する時代になってきています。ケースバイケースでステップを省略したり、粒度を荒くするようなことが理解できる表があれば活用しやすいと思います。最近では、経営やシステムの継続性でセキュリティの観点は外せないもので、関連法規や実務面での情報基盤の在り方などの言及もあって良いと思います。</p>
19	<p>PGLで業務システムはサービス開発・提供者からサービスとして調達するという前提で記述されていますが、DXの流れからローコード開発で内製化する動きもあるので、システムを開発するという要素も考えても良いと思います。中小企業においてはパッケージやSaaS/ASPの利活用が進められており、本格的な開発行為が減って調達と運用の比重が高まっていると思います。IT導入ステップではなく調達ステップで実施するような進め方もあるかと思えます。また、プロセス全体がウォーターフォールの発想が抜け切れていないので、アジャイル手法で業務改革・システム開発を同時並行で進めるスタイルの記載もあって良いと思います。アジャイル手法を留意点として整理する形も良いと思います。</p>
20	<p>PGL記載のRFP発行の説明文で、システム調達の留意点、開発手法を従来型のウォーターフォールではなく、アジャイル型になったときの留意点などを追記した方がよいかと思われまます。</p>
21	<p>PGLでのプロジェクトマネジメントでは、P2Mのような体系を示している訳ではなく、一般的な「プロジェクトマネジメント」と混同するような記述も多いようです。ITCのガイドとして、大規模かつ複数プロジェクトの管理手法である「プログラムマネジメント」が必要か疑問に思っています。前のPGLでは日常の企業活動／プロセスとプロジェクトという切り口で、その方が納得感がありました。モニタリングでは、それぞれにプロセスに関連するところなので、その観点で記載した方がわかりやすいと思います。</p>